

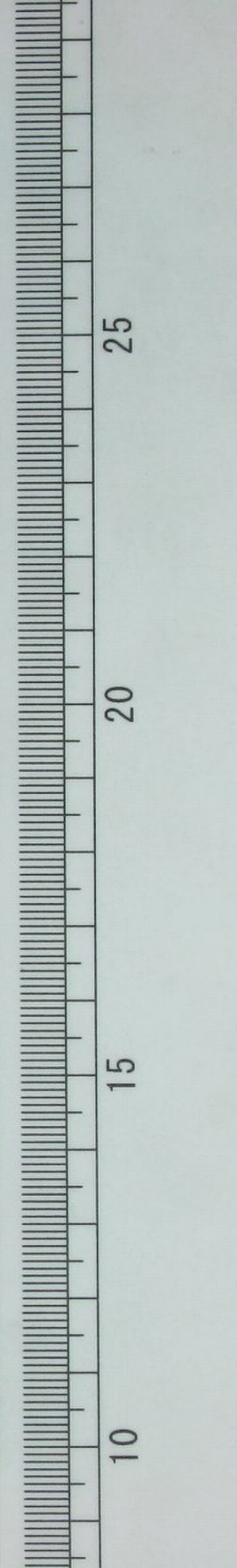


猫々道人原稿
 京文舎文京綴
 守川周重画

幻物編
 猫の
 ぼんぼり
 ぼんぼり
 ぼんぼり



青盛堂發兌



金花胡蝶幻

初編上の巻

かき書板

猫とて人系稿

京久舎文系稿

中川周意画



鼠と家鹿と稱へ猫と家虎と呼者蓋し其形象の相類似といふなり
 抑絃妓の猫の唱の平常手馴し三味線のひと皮意み出るの皚皚
 所謂猫名詮字性への謝肇淛が五雜俎に記載せる天順の間西域
 より貢ると云猫玉は威と作て京濱十里の門に往還始め靴屋の白
 鼠藤栄と先とて我も惑溺る漂客旅を悉く齒牙も懸たる國助
 寢見が変化自在の小傳と義みいふは新聞紙面への極散ちる柱の
 爪跡のあ尿便乃のりと青盛堂が金龍の精製美冊のちのちと
 乞ふより例の文京の余小代り繪と漆文の足らぬを補ひ猫尾と虎の結
 と繼ぐ三編續貂の草史に換るの余が猫團と謝を可き而已

明治十二年夏日

金花猫公羽魯文戲誌





石秀女房おその



石工藏石秀兵衛盗賊
白浪秀太郎

次職甲府の久吉

石工藏



盗賊早業清太

金花胡蝶幻初編上之巻

東京

猫々道人原稿
京文舎文京綴

發端

運ぶまゝの歩めを親おろしおぼへたりしと藝者の
状の連懐をよく保ちかゝりし一夷曲の清氣の我おもひ
華美なる衣袋のむらり清氣の我おもひ
巧精の意を今とさる事十二年先づは京橋南橋の町三丁
目小松橋岡屋の家居も清氣の我おもひ
のるありきと此事も二八のつらき
ささしき親をせむひとら娘の我おもひ
世に傳ふる業の三味線踊りふ有く四季の文隠後いおその



ふき 夢の寝ぐし紀と
 筆頭の振りの
 新那めしと
 友祝の息
 多ぐと
 相見遊技
 不連を歩けり
 客小後けの酒宴の
 席にも郷土夜小供の
 娘の藝及お七のハ
 日々小斎場所るる
 晴元何来が許へ

△縁下あふ
 ぶが縁のちあ
 あて舞うと
 縁
 手
 出
 逢
 耳
 互
 夕



修汲股と味
 縁 縁古の
 同家小化せく
 如多ふ若男ハ本村所二丁目の
 云地ふ忘るる右工蔵秀を弁
 とく 幸のらる二十七ハの
 便客を彼とあまじく
 清元の妙通一ツ縁古傍を兼
 用候由常由若人素既秀舞と
 客子小浮立おそのハ海くおひと
 目わらと小晴と運びて内渡ひの△

夕
 縁
 手
 出
 逢
 耳
 互
 夕

此車の よう
 再入るより
 妹奴の人を頼む
 何せや
 おそのと妻不
 まんと志なく迫るに
 子にあぬさ親のあひと
 彼妹人ふらちまうせを

来たれは
 さねがふあめい
 こころの影ひ
 ぶで遣ひく
 妹一さ残むけい
 袖あつとけり今宵い
 自由のあまらぬる哉
 ちとらんくもあゝ実不
 丸の志とく疎めく弱の
 足ぐれましく隣ちく間ふ
 三年と迫る小らある秀い
 祖父の代より

手後き
 石工の
 棟梁棟ま
 破人まごも
 何不足るは
 自由のあまらぬ
 の病いの老南
 小娘
 坊に
 あま
 麻あ
 更

園力刃上



園力刃上

かそのせ
 石秀一
 嫁入
 らん
 おとせ

丹子由
 あわく

一 夜二夜と及ぶうちたれど
 家お初へねば多の令と
 持之を今宵も持利
 まくも是れど惚けそ
 きつろと世の一夜も
 狩もえの次貝か
 笑ふもあられ
 のまろ何も百
 田二而田と強
 て帰ると女の油
 ちろふれ来るて



商人の貨
 小十月ハ
 魚買事
 備の林と
 繋ること
 今由市店の
 懐のあ
 彼石秀く出入
 されの或る
 商家
 小

懐く事いあふおる夫婦
 申いと藤くく常さうち
 友小一の音候と合
 破片
 結と開
 きろ
 旅りの
 あり世の
 夕神月との



彼処不却く
 秀を希の舟子
 友三人引つるを
 愈せ
 きの
 きの
 けと
 備と
 けと
 けと
 けと

京文舎文京綴

猫道人原稿

中



金巻胡蝶幻初編

京文舎より作名をさす
なまねのふりかきしもの末がふり

云々
因縁法



瓶云奴

國女の因縁

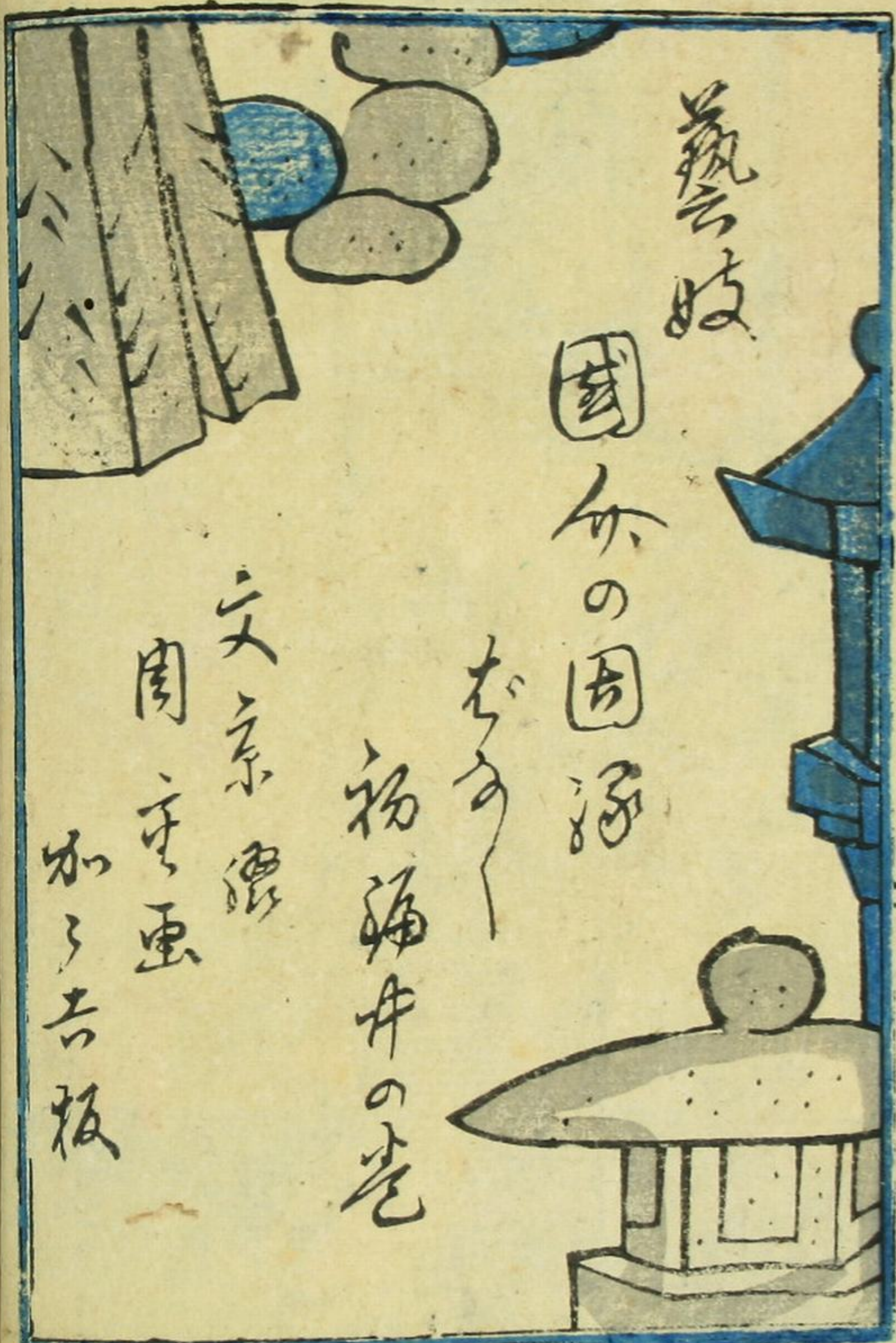
なま

初編井の光

文系徳

周子重

かろ吉板



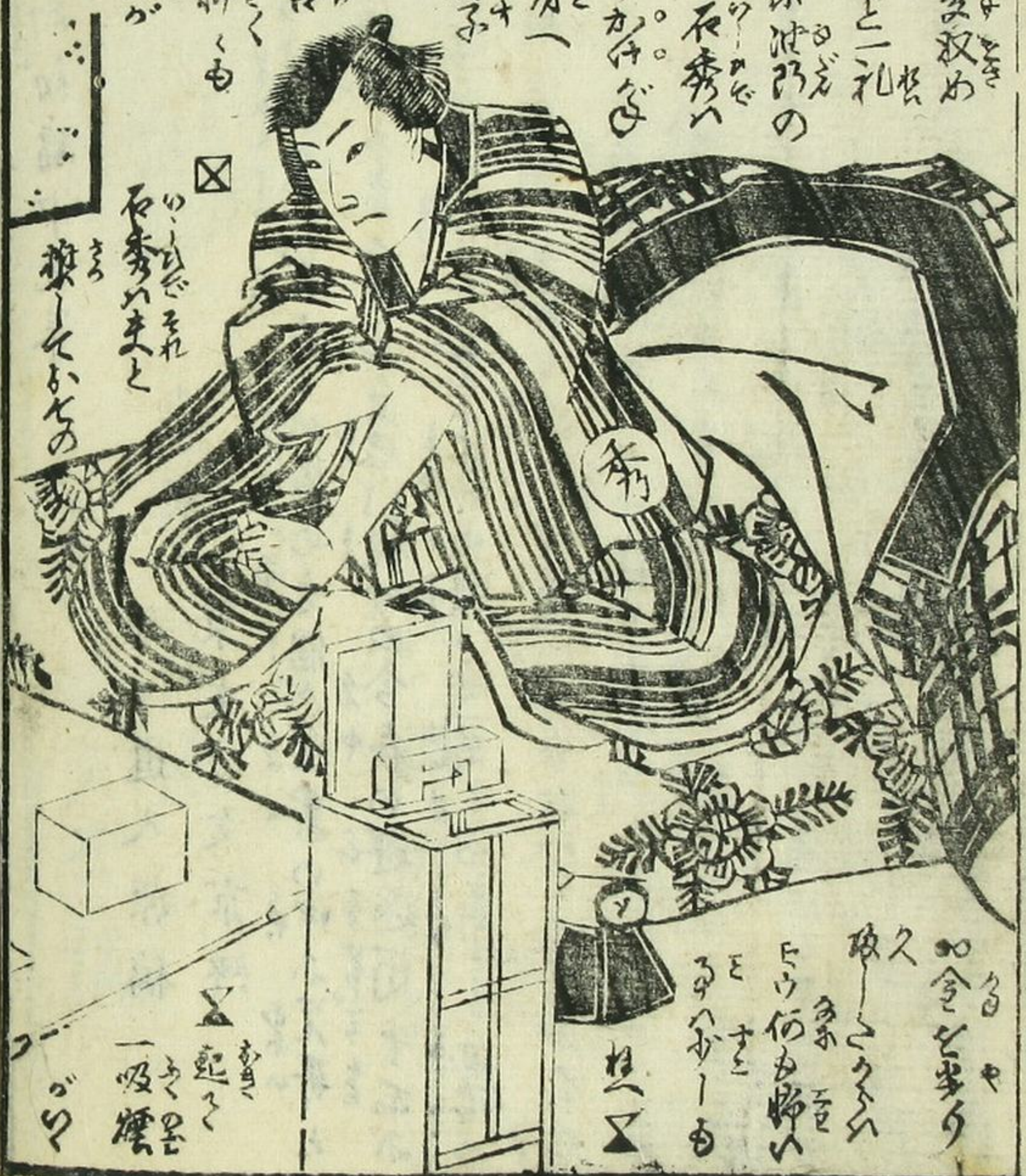
金花胡蝶幻初編中之巻

東京

猫々道人原稿
京文舎文京終

再び流波三人の盜賊の悲び入たる此家の白個が連累の中不兄弟と
経一振符門の秀を常多んといふ以て後叶ぬ今夜の遊遊一回生不
漆まのき「定まるといふこと」んごんごん出遇之在「定まらぬ」と白浪の
家へ返る夜柵らき「初」久きも法を弁由借者も打つまをまぶるは
事と心ひの外自己の家と立別き「口」掃り由内而を新つてみるこの
藝者へ折るまの「常」以て後計由之幸「定まらぬ」といふのよろと云
「あはれ」えんふ字の毒ど何の更も取まのが自己が寸意の小巻以て
あのが巻でも折て取つてこれ「紙」入の中より取出す十回札盗人「ま
仲間」の義理返すと強くと押問答折角の志し「解」返さるも何事と云

三人の令と妻叔め
長物倍の壁お耳と一礼
のて出の、後不許の
ふらぬ不掃りと石秀の
後と壁の内よりか付を
確して元の室秀一
と書入るる彼
より一夜の紐口
より脱きみかす怖くも
おそののま石秀が
身上と指めて



石秀のま
後と壁の内よりか付を

久
取
石秀のま
石秀のま
石秀のま

岡部より今知
去りし盗人と懸
家の換ふ術の二合依の
本末も彼共等の同類
あるは是れを如何に
あてあひ合はるる日
情実不掃りと云ふ
持久之なるは合の表
働きの盗み物と云ふ
然りさかを色さ後表ひ
被りて物つらび思ひ青み
土表の表を凌ぐ心持



石秀のま
石秀のま
石秀のま
石秀のま

一葉の強火



ひやく
とま
のち
よと
ふえ
うまが
恨しむ傍に
小落ると
名をて清美より
○周の者い必ら果あり
造物の生天と造りや

△一と世あり共
足徳の池味霞幻
かそのへま秀
古帯が廻前
のそとを
交て谷中
の墓地み華む
まつ、日か以備



人死しとて強火と云ふ
か一再び焚ど
造りて成るえふ
か一異魂と云
狐も収む
と云
及の
事り
寛け
るの
うて地と
ふい
あへぬ
買きわめて△

三十五
日不怪一
青帯と云
しり由控候
のい中返して生
後由急うら
茶糸りお沈り
あはとるく
古二月中旬の△



秋の夜の
 物忘れ

國力の口

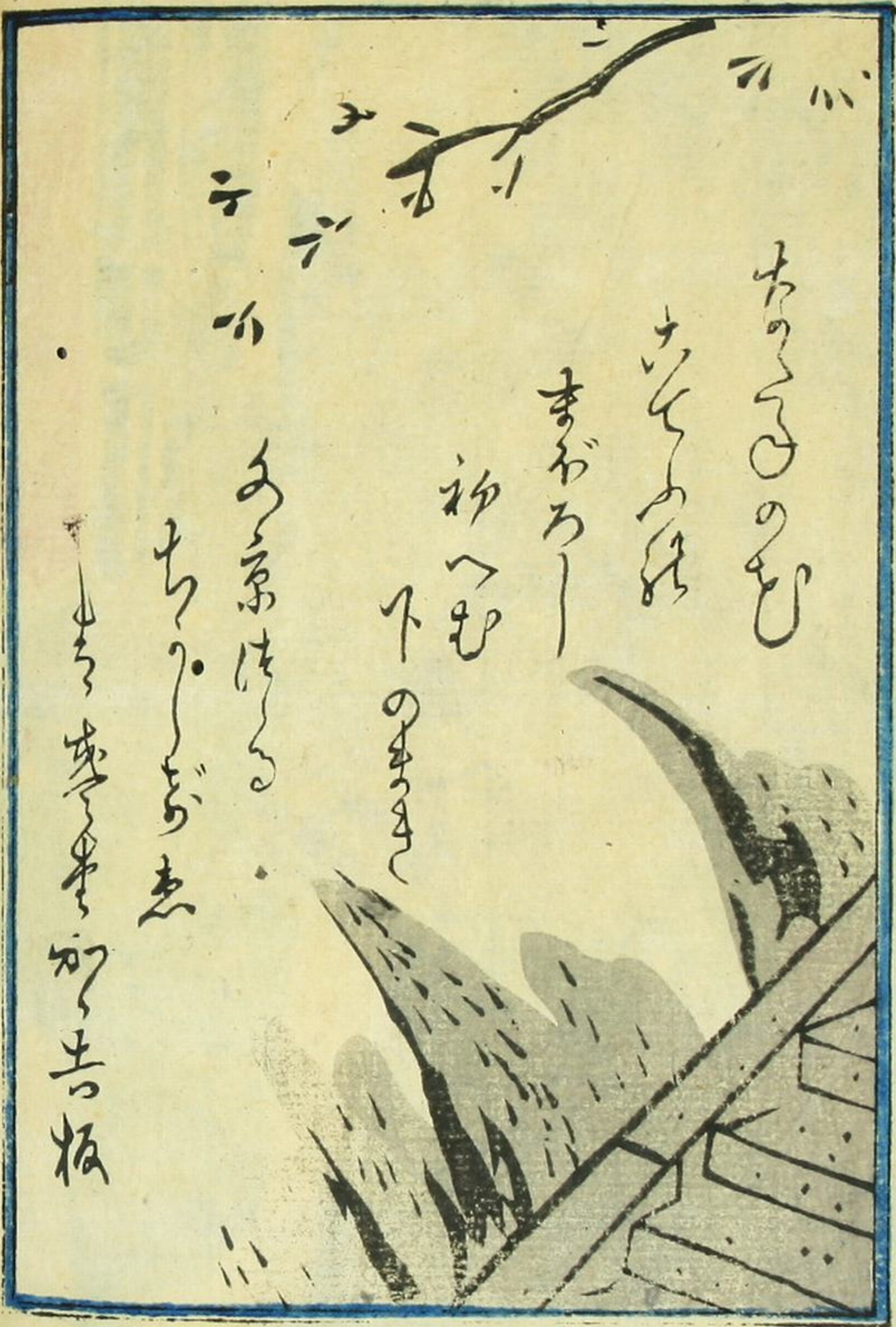


谷中の寺の法師が
 上符の山と通る道
 兼門帯より白雲と見舞ふ
 春の好樹若花の盛り
 百かゆんと四方より集む
 春の若菜男女の雑苗混雜
 雑とまへさ地もる況を去
 心の深きてすろ世の心
 人の愉快にさす

小とろとろ

次とくくく
 ひろ
 あらひ
 とろ
 ちち





たのしみの心

まがらり

まがらり

初へむ

下のまがらり

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

金花胡蝶 第二編下之巻

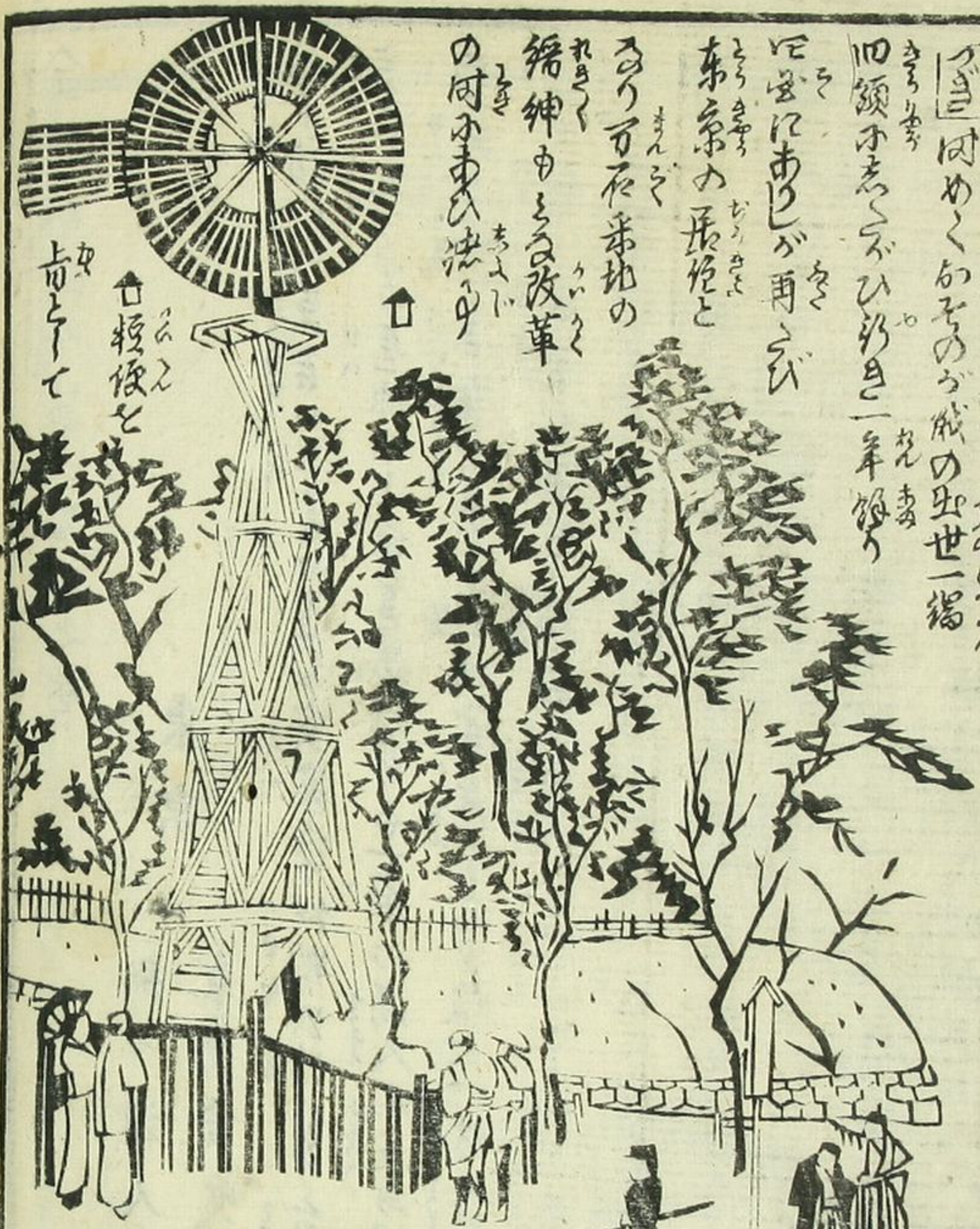
東京

猫々道人原稿
京文舎文京綴

根も龍門の長舌ハ字違おそのが実家も何幣を清以希方ハいふ委細の
 事と相違りる是亦小と云ふは清以希由一家の商人不足り此立此身代也
 あり板小娘と妻身公もいふ出以て身代もあらねど一獨盜賊の妻とあり
 身と釋一帯を害せし娘も此ハ商人さへいふもいふもいふもいふもいふも
 此の身と釋一帯を害せし娘も此ハ商人さへいふもいふもいふもいふもいふも
 四月のはじめに家令三村来と仮就とてかの編紳の家小のり
 實小氏もして此のり控妻居の位小のりぬ〇身と持て出さうるを
 漱のあり候満ちてくゝあゝぬ容総に由緒ある人の愛妻と次へ

園田のめくおその成の世一編
四領志くふひひき一年編り

正室にありが再々
東条の長佐と
あり百石米地の
編神ゆら改革
の何ふあひ決り



入こむ
中ひま
夫前
三味
線強
鶴津紋を
南竹本様
鷹を
岩公の舟一音
顔由石日夜来
里七ゆる
くおの八字

後茶の茶家
受小瘵して築地辺小
邸宅とゆらあ君公ハ
始めてんせらるるはし
力士ゆ優
津のり
あるま村
同落指家
備控
油踊
兜
鳴つら屋夜



権兵衛字
後ひは権兵
おろ丸お新討不
縁船の妙忠良
彼人小生
小島
晴の次





乃 ○ 生 婚の素人
 乙の如く
 乃 ○ 生 婚の素人
 乙の如く

園物切下

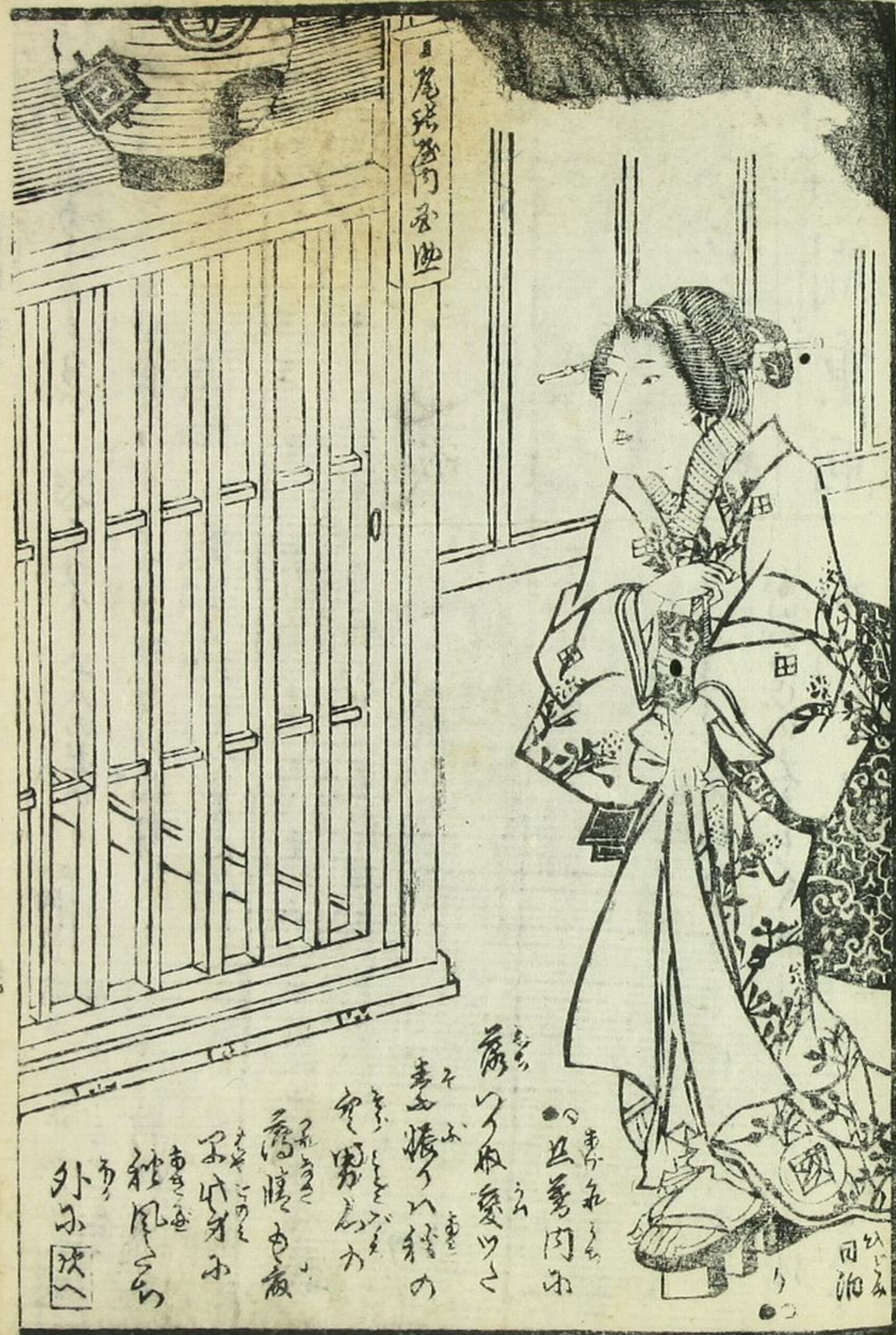
乃 ○ 生 婚の素人
 乙の如く
 乃 ○ 生 婚の素人
 乙の如く



乃 ○ 生 婚の素人
 乙の如く
 乃 ○ 生 婚の素人
 乙の如く

園物切下

乃 ○ 生 婚の素人
 乙の如く
 乃 ○ 生 婚の素人
 乙の如く



区田下

増補あまのこ

くねんと出入の老の

御届 明治十三年五月十日

花婿おととまのま

女房おひさの抱ねて

横山町三丁目十七番地

婿おりののり高嫁

若菜おの先をえん

編輯人 渡辺義方

も強くまきり家のとんえ

経て付るもあふ家の

出版人 堤吉兵衛

ふたる狗の火消さんと

たふてきてる風橋急

米沢町一丁目六番地

お清やうて孫増へのる橋

の淵辺のぼりお船陸子

出版人 堤吉兵衛

の南のり二人が抱ねて

を開て入る谷をまお

と素肉一七

大事なるまを孫とる女

けうる商家の小婢が

作はひ入る

おんぞんおねの皮ひんむき

おたはひの太子とく

○竹二ツ引

京文舎文京綴

守川周重画

那が外のおあーの

つた出版

新編西國奇談

廿編より 追々出版

薄緑娘あふなみ

八編より 追々出版

娘庭訓黄金の鶏

追々出版

御届 神田區仲町一丁目六番地

明治十一年十二月十七日

編輯人 篠田久次郎

地本錦繪問屋

日本橋區米沢町一丁目七番地
出版人 堤吉兵衛

010190510617



明治十五年二月來之

山上裏所

我書

三〇〇

物始てし一求之

老ぬれど

智あるは

我盡成

あれが持主

中を聞他

昔の物なるは